

渋沢栄一と廣池千九郎の「道德經濟思想」の比較研究

大野 正英

目次

- 一 はじめに…渋沢栄一と廣池千九郎
- 二 渋沢栄一の業績
- 三 渋沢栄一と廣池千九郎の交流
- 四 渋沢の道德經濟一説
- 五 廣池千九郎の道德經濟一体思想
- 六 渋沢に対する廣池の義務先行説に関する影響の可能性
- 七 渋沢と廣池の思想との比較
- 八 まとめ

一 はじめに…渋沢栄一と廣池千九郎

渋沢栄一（一八四〇—一九三二）は、明治から大正にかけての日本資本主義の黎明期において、多くの企業の創立や経営に携わり、日本の近代化において主導的役割を果たした代表的な

経営者であり、「日本資本主義の父」と呼ばれる。また、『論語と算盤』という著作に代表されるように、儒教に基づいた「道德經濟合一説」という独自の経営哲学を説き、当時の人々に大きな影響を与えた。

一方、道德科学（モラロジー）という学問を創建し、麗澤大学の創立者である法学博士廣池千九郎（一八六六—一九三八）は、渋沢より二十五年ほど後に生まれているが、「道德經濟一体思想」と現在呼ばれる思想を説いている。渋沢の「道德經濟合一説」と廣池の「道德經濟一体思想」は、ともに道德と經濟が本質的に一致するという説であり、したがって実際の經濟活動を道德に基づいたものにしていかなければならないと主張する点で共通する部分が多い。

本論文においては、両者の交流について明らかにするとともに

	渋沢栄一略歴	廣池千九郎略歴	時代背景
1840 (天保 11)	現在の埼玉県深谷市に生まれる		
1866 (慶応 2)	幕臣になる。	現在の大阪府中津市に生まれる	
1867 (慶応 3)	パリ万博使節として渡欧		
1868 (明治 1)	欧州より帰国		明治維新
1869 (明治 2)	大蔵省入省		
1873 (明治 6)	大蔵省辞職、第一国立銀行開業		
1875 (明治 8)	第一国立銀行頭取		
1878 (明治 11)	東京商法会議所創立・回答		
1884 (明治 17)		教員免許を得、教職に就く	
1886 (明治 19)	竜門社創立、養育院慈善会創立		
1889 (明治 22)			帝国憲法公布
1892 (明治 25)		歴史家を志し、京都へ移る	
1894 (明治 27)			日清戦争
1895 (明治 28)		『古事類苑』編纂のため、上京	
1900 (明治 33)	男爵を受爵		
1901 (明治 34)	日本女子大学校開校・会計監督		
1904 (明治 37)			日露戦争
1907 (明治 40)		神宮皇学館教授として赴任	
1909 (明治 42)	古希を迎え、多くの企業の役員を辞任。実業団団長として訪米		
1910 (明治 43)		この頃から労働問題に取り組む	
1912 (明治 45)	婦一協会創立、『青淵百話』刊行	法学博士の学位授与	
1913 (大正 2)	廣池千九郎、婦一協会にて講演(義務先行説の発表、渋沢から質問を受ける)		
1914 (大正 3)			第一次世界大戦
1916 (大正 5)	喜寿を迎え、第一銀行頭取等を辞任、実業界からの引退。以後は社会活動に専念。『論語と算盤』刊行	この頃から国民道徳運動に各地で講演を行う	
1919 (大正 8)		華族会館にてモラルサイエンスについての講演を行う	
		12月21日、廣池千九郎、渋沢邸を訪問	
1920 (大正 9)	子爵を受爵		
1921 (大正 10)	排日問題善後策のため、訪米		
1923 (大正 12)		畑毛温泉にて『論文』執筆	関東大震災
1926 (大正 15)		『道徳科学の論文』完成	
1928 (昭和 3)		『道徳科学の論文』初版発行	
1929 (昭和 4)			世界恐慌
1931 (昭和 6)	11月11日死去 (91歳)	大毎講堂講演会、社会教育活動を本格展開	
1935 (昭和 10)		道徳科学専攻塾開塾	
1938 (昭和 13)		6月4日死去 (72歳)	

に、両者の道德経済思想を比較検討して、その共通点および相違点について考察することを通じて、それぞれの思想の特徴について明らかにしていく。

ここで最初に筆者が感じる疑問点を一つ提示しておきたい。筆者は、これまで廣池の「道德経済一体思想」に関する研究を続けてきたが、そこには一つ疑問に感じている問題が存在する。廣池は当然、洪沢栄一の「道德経済合一説」を知っているはずであり、かつ洪沢が企業経営とともに、各種の慈善事業や社会事業を行っていることも理解していたはずである。にもかかわらず、その主著である『道德科学の論文』や『道德科学経済学原論』などにまったく洪沢に関する言及がない点である。後に述べるように、廣池と洪沢の間には、頻繁ではないとしても、交流があり、廣池自身も洪沢の業績やその人柄に対して尊敬の念を持っていたことが確認できる。廣池の側から洪沢の考え方をどう受け止めていたかを探ることが、本稿の狙いの一つである。

なお、洪沢と廣池の思想についての先行研究としては、多田顯「洪沢栄一思想・行動とモラロジー」(『モラロジー研究』第九号、一九八〇)がある。ここでは洪沢と廣池の儒教観および孔子観の比較がなされているが、多田は、洪沢と廣池の交流については認識しておらず、「交流は全くなかったと言い得るであろう」と述べている。また、廣池の儒教観については、次

のような点を指摘している。孔子の精神には天ないしは神に対する信仰が強く、それが孔子の真髄であること、にもかかわらず儒教が宗教としてではなく、純道德的に発達したことによって、孔子における神に対する信仰が後継者に受け継がれなかったこと、それがために他の宗教と比べて民衆に対する感化力では及ばなかったが、反面知識階級に対しては強い影響力をもったことなどである。廣池についての言及は以上の部分にとどまっており、後は洪沢の思想について述べられている。

二 洪沢栄一の業績

廣池と洪沢の関係について述べる前に、簡単に洪沢栄一の業績について触れておきたい。

洪沢は、江戸時代末期の一八四〇年(天保十一年)に現在の埼玉県深谷市の豪農の家に生まれた。六歳ころから漢文を習い始め、この頃培われた漢学の教養が、後の洪沢の思想の基盤となっていく。その後、一橋家に雇われ、当主の慶喜が十五代将軍に就くこととなったため、幕臣になった。

翌一八六七年に慶喜の弟である徳川昭武を代表とするパリ万博使節団の一員として欧州を歴訪し、さまざまな施設や制度を直接目にしたことが洪沢にとっての大きな転機となる。一八六八年の大政奉還によって急きよ帰国することとなり、翌一八六

九年（明治二年）には明治新政府に出仕したことで、近代日本の基礎づくりに関わる多くの政策に携わったが、政府上層部と対立して、一八七三年（明治六年）に大蔵省を辞職することになった。

辞任後は、民間人として日本の商工業の発展のために活躍することとなる。大蔵省在職中に関与し国立銀行の第一号として、第一国立銀行の経営に関わり、後には頭取の座に就いた。この銀行を出発点として、多くの企業の創設に関わっていくこととなる。ヨーロッパ滞在中に学んだ「合本主義」の考え方に基つき、多くの有力者に資金の拠出を呼びかけて、株式会社を次々と設立していった。

洪沢が生涯に関わった企業の数は、約五百と言われている。その関わり方はさまざまな形をとり、会社の設立を主導し、一定の株を引き受けて出資者となるほか、取締役や社長など実際に経営にも携わることもあった。「合本主義」という考え方を基盤として、多くの人々を企業経営に出資させ、参画させることを通じて、彼らに経営の経験を積む機会を設けた。また、これらの企業の中には、電力やガス、鉄鋼、建設、物流といった産業基盤と関わるものも多く、こうした取り組みを通じて、日本の資本主義の基盤の整備に尽力した。洪沢が「日本資本主義の父」と呼ばれるのは、こうした功績が評価されたことである。また実業人の地位向上を目指して、その組織化においても

中心的役割を果たした。

洪沢の業績のもう一つの側面は、公益事業・社会事業の分野においても主導的役割を果たし、多くの財界人をこうした事業に巻き込んでいった点にある。彼が関わった社会事業は、関与した企業の数よりも多く、六百にも上ると言われている。近代化の陰で起きてきた諸問題に対して洪沢が取り組んだ事業分野は、社会福祉、教育、労働、国際交流、道徳の普及など非常に多岐にわたる。

一九〇九年（明治四十二年）、古希を迎えるにあたって、一部の銀行などを除くすべての会社の役職から退いた。また、一九一六年（大正五年）には、銀行の役職も辞任し、実業界から完全に引退することとなり、その後は、各種の社会事業に専念することとなった。

洪沢が「経済道德合一説」を盛んに唱道するようになるのは、ちょうどこの引退の前後にあたり、『論語と算盤』が刊行されたのも一九一六年のことであった。この頃特に力を注いだのが、当時問題となっていた労働問題の解決であり、米国等との摩擦を解消するための民間外交であった。晩年をこうした社会事業とともに、商業道德の思想の普及に尽力した後、一九三一年（昭和六年）十一月十一日、九十一歳でその生涯を終えた。葬列の沿道には、洪沢を慕う多くの人々の列が絶え間なく続いたとされ、洪沢の影響力の強さと広がりをも物語っている。

三 洪沢栄一と廣池千九郎の交流

(一) 穂積陳重と阪谷芳郎

廣池は洪沢からおよそ二十六年後に生まれており、ほぼ一世代の違いがある。洪沢が幕末の混乱期に少年から青年時代を過ごし、新政府の成立とともにそれに参画し、以後の近代化の波のただ中で中心的な活躍をしたのに対し、廣池は明治初期西洋文明が急速に流入する近代化の波の中で、人格形成期を過ぎた。また、廣池がモラル・サイエンスの研究に本格的に取り組み、道德と経済の關係について講演などを行った大正の中期は、洪沢が「道德経済合一説」を積極的に展開した時期と少し遅れるものの、ほとんど重なっている。後述するように、モラル・サイエンスの研究の普及に当たって、社会の上層部への働きかけを廣池は試みているが、洪沢もその重要な対象の一人である。

この両者を直接につなぐ人物として、洪沢の娘婿である穂積陳重と阪谷芳郎の存在が挙げられる。洪沢の長女歌子の夫である穂積は、廣池を東洋法制史研究へと導いた学問上の師であり、廣池に強い影響を与え、廣池も穂積に対して尊敬と感謝の気持ち強く抱いていた。また、次女の夫である阪谷は、廣池の活動に対して理解を示して長年にわたり支援を続け、新渡戸稲造、白鳥庫吉とともに『道德科学の論文』に序文を寄せたう

ちの一人である。

一方、洪沢と穂積、阪谷との關係は非常に深く、洪沢、穂積、阪谷の三家族は、同族会と称して月一回の会合を持ち、親しい交流を続けていた。穂積と阪谷は、ともに栄一の相談役であるとともに、代理人的な役割を期待されていた。特に、洪沢の長男である篤二が、遊蕩を重ねて廃嫡された事件においても、穂積と阪谷が篤二に対して忠告を繰り返すなど大きく関わっており、同族会が廃嫡の決定を下している。また篤二に代わって家督継承者となった篤二の長男である敬三の後見役を務めている。

洪沢と廣池との交流において、穂積や阪谷がどのように関わったかについては、資料からは確認できていないが、洪沢との最初の直接的出会いと考えられる帰一協会における講演には阪谷が出席している。

(二) 帰一協会における講演

洪沢と廣池が初めて直接会ったのは、一九一三年（大正二年）に帰一協会において、廣池が「天理教の教理及び實際に就きて」と題した講演を行った時であると思われる。帰一協会は、洪沢栄一が東京帝国大学教授姉崎正治、日本女子大学校長成瀬仁蔵、鉄道院総裁床次竹次郎などとともに発起人となり、混んとしている日本の思想界を統一するという趣旨で組

織された会であり、毎月一回上野精養軒で例会が開かれていた。廣池のこのときの講演は二時間半にわたるもので、天理教の天啓についての話から始まり、天理教の国家及び社会に及ぼした効果について論じられていた。

廣池は、この講演について『最高道徳の特質』において、後の最高道徳論の中核の一つである「義務先行説」について初めて発表した場であったとしている。^①後に取り上げるが、洪沢栄一は義務を先行することを自らの教訓としており、その関連性の点からもこの講演は注目される。

『帰一協会報』第三号に収録されている講演録を見ると、「真正の権利とか自由とかまた真正の威厳とかいうものは、自ら主張して得られるものではなく、他よりも与えられて初めて完全に成り立つものである」と私は考えますから、今日の思想状態はまだまだみな不完全で、目下進歩の途中にあるもの」という部分があり、これが該当する箇所であると思われる。

またこの講演について報告された『道の友』の記事(第二六四号)では、この講演会の状況について、法学博士添田寿一の討論の席上での次のような発言が記録されており、廣池が提示した義務先行説に対して、添田が高く評価した様子がうかがえる。

「天理教教理は、法律上の権利は、自ら主張せずして、他

より与えられて成立するものである。また、威厳とか、威信とかいうものも、自ずから保たんと欲して保ちえるものでない、他人から心服せられて初めて成り立つものであるとのお話でありましたが、私の宿論もその通りであります。人間は、義務を果たすことによって、他よりこれに伴う権利を与えられるものであるという考えであります。」

この『道の友』の記事においては、洪沢の反応についても、次のように記述されている。

「洪沢男爵もまた、最も熱心に種々の質問を試みられ、次回博士の御上京は何時なりやとただし、博士は一二月には早々上京して、帰一教会の例会にも出席いたしますと答えられ夜の更けるを惜しみつつ袂を別たれりと云う」

「会員がいかにこの講演に向かつて興味を持ちつつ集合したるかは、洪沢男(ママ)が、当夜は前橋に宿泊せらるるはずなりしも、博士の講演を聴かんがために、わざわざその予定を変更して来会せられたること、(中略)これを察知するに足るべし」

この記事を見るかぎり、廣池の講演に対して、洪沢が強い関

心を持っており、講演終了後も関心を持ち続けていたと思われる。

(三) 廣池の日記に見る渋沢とのかわり

廣池は長期にわたって日記をつけており、廣池自身の記録とともに、弟子たちによる日々の行動の記録や関連する記事が保存されている。そうした日記の中に、渋沢の名前が登場するのは、次の六か所である。

①大正八年十二月二十一日 (『日記』② 二二〇頁)
十二月二十一日 渋沢栄一氏へ行く。

②大正九年六月四日 (『日記』② 二五五頁)

六月四日 夜、九十日目くらい (三月七日) に入浴す (潮湯)。理髪はねて居って二、三度刈り込む。

二日以後、再び研究所のこと、山県、大倉、渋沢、山下 亀三郎、武藤等開発のこと神様に願い上ぐ。

連日夜、六度五分くらい。少し風気あれば、七、八分。

③昭和三年十月一日 (『日記』③ 二二二頁)

十月一日 渋沢子爵八十八才の御祝儀式の御祝いの電報 差し上ぐ。

④昭和五年一月四日 (『日記』④ 五頁)

一月四日 先生は、昨日の御口演後の御疲労のため御臥

床遊ばさる。

残留者十人にて座談会をなす。参会者、若先生、丸井氏、中田氏、香川氏、塚谷氏、北出氏、石橋氏、六波羅氏、小口氏、松下氏、以上十人。ほか十一人は午前九時半 帰省さる。

広池博士の御使いとして新倉様を御足労を願ひ、渋沢子爵邸に土産を御届け願ひ、同時に帰京の上御伺い致したき 旨御取り次ぎを願ひしところ、子爵の御返事として「いいえ御足労には及びませぬ。御上京のことを御知らせ下されば、こちらから御伺い致しますから何卒宜しく御申し上げ下さい」と仰せられし由。新倉氏も、子爵のこの御丁寧なる御挨拶に驚かれたとのことあります。道徳の力の偉大なること推して知るべしである。

⑤昭和七年八月十三日 (『日記』④ 二八七頁)

八月十三日 きりづみ〔霧積〕における大塚氏に対する 先生の御話の要点。

(中略) 成功者の行動は知らず識らずに自然の法則に近き 事をなした人である。渋沢、中上川〔筆者注…中上川彦次郎〕

⑥昭和九年九月二十七日 (『日記』⑤ 二〇六頁)

(前略)

〔貼付五、印刷物〕

(福井第一回) 道德科学《モラロジー》講習会規則 (昭和九年十月)

(中略)

今モラロジー(道德科学)は、広池博士が過去数十年間に亘って深遠の研究を重ね、その大小の項目悉く自らこれを実行経験して後に確定せるところの新科学にして、昭和三年我が国における世界学界の権威者たる故新渡戸、阪谷、白鳥三博士(年長順)の御推薦をもって始めて世界の学界に発表せるところの二十世紀における精神界の一大産物であります(非売品)。英訳は、目下三分の二以上進んで居り、實際家としては故山県公、故大木伯(遠吉)、故渋沢子(子爵)を始め高邁卓越せる日本現代の産業界経済界の諸名士が当該新科学をもって真に修身、齊家、経国の大文字にして、特に現代の産業経済界に横たわるところの諸問題に関してこれを打開する好資料なりとなし、(後略)

以上の記述について、他の資料から確認できた内容を基にして簡単にコメントをする。

① 大正八年十二月二十一日

同年五月二十一日、十一月二十二日、二十三日、華族会館において大木伯爵の主催で開催された講演会が開催さ

れており、モラル・サイエンスの内容を中心とした内容となっている。渋沢は、十一月の講演会に参加している。この記事の二日前の十二月十九日に、麴町内幸町幸俱樂部において、モラル・サイエンス運動についての講演会を開催している。貴族院に属する公正会、茶話会、同成会の会員など三十一名が参加した。十二月十九日の講演会には、阪谷芳郎が参加している³⁾。

これら一連の講演会は、まず上層階級からモラル・サイエンスを普及させようとする思いが込められており、渋沢はその有力な一人とされていた。『伝記廣池千九郎』では、このときの渋沢邸訪問の目的は、自説に対する批判を求めするためとされているが、出典は確認できていない。

② 大正九年六月四日

二日前の六月二日に、幸俱樂部において、内田正敏男爵の主催によりモラル・サイエンスの講話を行っている⁴⁾。参加者は不明であるが、日記の記録はこの講演会と関係があるものと考えられる。渋沢を含めた政財界の有力者に対する、モラル・サイエンスに関する開発に対する思いの強まりが感じられる。

④ 昭和五年一月四日

廣池からの訪問ではなく、渋沢の方から訪問するとの回答がされている。それだけ尊重されていると、廣池の側が

受け止めている内容である。

⑤ 昭和七年八月十三日

洪沢について自然の法則に近い行動をしたがゆえに、成功したと評している。中上川彦次郎は、三井財閥の改革を行い、三井中興の祖とされている。

⑥ 昭和九年九月二十七日

洪沢が、モラロジの構想に対して評価していることを述べている。

モラル・サイエンスの構想期において、社会の上層階級が主な普及対象として考えられており、政財界の有力者に働きかけてその開発が目指された。その一人として、洪沢の名が挙げられているが、洪沢の思想や財界に対する影響力などが評価されるとともに、帰一協会や斯道会などを通じた廣池とのつながりも考慮されたのではないかと考えられる。

また大正十三年と推定されるメモには、「洪沢子爵に、欧米人に対する千九郎の研究の公開的紹介文を願いたし。序文のごときもの。もちろん日本語にてよろし。こちらにて訳す。」とある。欧米人に対する洪沢の知名度を頼りにした支援を考えていたと、推測される。⁽⁵⁾

(四) 洪沢に対する廣池の評価

昭和九年のものと推定される「経済、財政及び産業に就きて」と題する講演原稿の中で、洪沢の業績について、以下のよう
に言及している。これは、洪沢が亡くなってから三年後のことである。

「洪沢さんは論語を読まれた。最高道徳では未だなかったが、論語を經典として孔子の教えに抛り自己を修め、家を齋め自分の事業をやって行かれた。私の先生の穂積陳重先生の奥様は洪沢子爵の夫人の腹から出た方で阪谷男爵の夫人も同様であります。その関係から、私も屢屢洪沢子爵のお宅に伺いこの最高道徳に就いてお話いたしました。未だ本も出来ず、具体案も出来ない時でありましたが非常に結構なことであると大変喜ばれ、度々ご馳走になりました。子爵の事業は常に道徳的でありました。三井の大番頭中上川彦四郎と云う人は非常な辣腕家で智識一遍の人でありましたが、その人が洪沢子爵の事業を圧迫した。その時皆は大変憤慨したのであります。私に徳がないのである。自己反省と云う事を知っている。とても中上川君には及ばない。又三井の財産にはとても及ばない。成り行きに任す外ないと常に向うに譲っておられました。こう云う態度でいられたから長生きをしてついに子爵にまで登ら

れ、陛下も一遍会いたいと云う仰せで、九十歳になられた時、杖をついて宮中に上り、陛下に拝謁の光榮を得られました。今の二代の方も子爵の教訓をよく守られ、中々よくやっておられます。私の先生の穂積家にしても、阪谷男爵も皆その血統を引いて、ご子孫は優れた方です。」

この記事自体は、洪沢の没後三年ほど経ってからのものであり、回想であるが、そこからいくつかの点を読み取ることができる。

まず、事実としては以下の点が確認できる。

- ① 洪沢との関係が、穂積陳重や阪谷芳郎を通じてのものであったこと
- ② 日記に記されている他にも、洪沢の自宅を訪問し、最高道徳について話をしたことが何度かあったこと
- ③ その訪問の時期は、モラル・サイエンスの本も具体案も出ていない時期、すなわち大正九年前後であったことである。

また、廣池の洪沢に対する評価については、次のようにまとめることができる。

- ① 『論語』を基にして行われた事業が道徳的であった。
- ② ただし、最高道徳にまでは至っていない。
- ③ 三井等の財閥から圧力をかけられたが、それに対して自らに徳がないと自己反省しており、結果としてその姿勢が、後年の長寿と世間からの高い評価につながったこと。
- ④ 直接の後継者をはじめ、子孫がそれぞれに優れた人物であること。

これらの評価をまとめるならば、廣池自身が洪沢の人柄とその道徳的な経営に対して、高く評価しており、それが本人及び子孫に結果として表れていることを認めている。いわば、道徳的な経営者の一つのモデルとして捉えているといつてよいであろう。ただし一方で、最高道徳というまでには至っていないとも考えている。

四 洪沢の道徳経済合一説

洪沢は、『論語』に基づいて事業を行っていることを繰り返し述べている。本格的に道徳経済合一説を展開するのは、実業界の第一線を退いた大正五年頃からであり、この年にはそれまでの講演の記録をまとめて、『論語と算盤』を出版している。しかしながら、自叙伝の中で、『論語』を自らの活動の中心に

すえることを決めたのは、大藏省をやめて民間の実業界へと身を投じた当初からのことであつたと、述べている。以下は、その部分の記述である。

「私は商工業に経験はないけれども、この方面においては当時の民間の人々よりも可能性に富んでいると考えておつたし、やつてやれない事はないという自惚もあつた。これと同時に商工業者の品位を高める事が必要であると考え、自ら率先して論語の教訓を服膺し自ら範を示すと同時に民間実業家の品位を高めようと考えたのである。論語は二千年四百年以前の古い教訓であるが、我々の処世上最も尊むべき実践道德であり、また実業家の金科玉条となすべき教訓も沢山にある。例えば『富と貴きはこれ人の欲する所なれども、その道をもつてせざればこれを得るも居らず、貧と賤しきとはこれ人の憎む所なれども、その道をもつてせざればこれを得るも去らず』のごときその一例であつて、実業家の如何にして世に処すべきかを明確に説き教えられて居る。それで私は実業界に身を投ずるに當つて、論語の教えに従つて商工業に従事し、知行合一主義を実行する決心である事を断言したような次第であつた。⁷⁾

つまり、当時の実業人の品位を高める事が必要であると考え

て、そのための指針を幼き頃から慣れ親しんだ『論語』に求めようとしたのである。当時の商工業者の品位が低く、渋沢のこうした方針に対して本当に実行できるのかと陰口をたたかれることもあつたことに触れた上で、「私は誠心誠意よりかく決心したのであつて、その後五十年間に亘る実業家としての行動を振り返つてみても、最初の決心を食言せずに行つてきた積りである。この点だけは自らいささか慰むるに足る点であると思つている。」と述べており、実業人としての人生を通じて、『論語』に基づいた事業という方針を貫いてきたことを自負している。

それでは、渋沢の説く「道德經濟合一説」とは具体的にはどのような内容のものであろうか。渋沢の「道德經濟合一説」はそれほど体系だつた形でまとまつてはいない。主著とされる『論語と算盤』は渋沢の講演録を編集して制作されたもので、必ずしも体系化された内容とはなっていない。同書は十章で構成されるが、そのうちの多くは渋沢の人生経験を踏まえた人生訓・処世訓というべき内容が中心であり、経済と道德の関係を中心主題としているのは、「仁義と富貴」「実業と士道」の章が中心であり、全体に占める割合はそれほど多くない。経済と道德の関係についての渋沢の考え方をまとめたものとしては、他に彼の死後七年に当たる昭和十三年（一九三八年）に渋沢翁頌徳会が生前の渋沢の口述をまとめて刊行した『道德と経済』が

ある。この他にも、多数の講演記録の中に「道德経済合一説」に関する記述が残されているが、その内容の要点はほとんど『論語と算盤』および『道德と経済』の中に収められていると考えられる。ここではこの二つの著作に基づいて、「道德経済合一説」に関する洪沢の見解の要点を整理してみる。

(一) 経済活動の道德的正当性

洪沢が儒教を基に経済を語るうえでまず強調したのは、孔子が経済活動やそれに伴う「富や地位」を軽蔑したわけではないという点である。『論語』の解釈において、「仁義王道」と「貨幣富貴」が相容れないかのごとくに一般に理解されていることについて、異を唱えている。『論語』の中の「富と貴とはこれ人の欲するところなり、その道を以てせずしてこれを得ればおらざるなり。貧と賤とはこれ人の惡むところなり、その道を以てせずしてこれを得れば去らざるなり」との句をもって、孔子が富貴を嫌悪したように捉える見方があるが、それは誤りであると指摘して、この句の解釈は正しい道理を踏んで得たる富貴ならばあえて差支えないとしていると考えるべきであるとしている。富貴そのものが問題ではなく、それが道理に従ったものであるかどうかの問題であると洪沢は主張する。

その上で、貧困から人々を救済し、安全な生活を保障するためには、国家社会が安定的に発展していくことが必要であり、

そのためには経済活動が必要不可欠であると主張する。それが正しい道理になつた活動であるならば、経済活動は、国を富ませ、多くの国民を救うという意味で道德的であると考える。仁義道德が空理空論になつてしまひ、経済活動自体を否定することになれば国を滅ぼすことになりかねないことを宋の国を例に出して論じている。結局のところ、「利を図ることと、仁義道德たるところの道理を重んずるといふことは、並び立つて相異ならん程度において初めて国家は健全に発達し、個人はおのおのそのよろしきを富んでいくといふものになる」として

金銭に関しても、それを大切にすると同時に、それを適切に使用することが、経済を動かして発展させるために必要であるとしている。

「金は社会の力を表彰する要具であるから、これを貴ぶのは正当であるが、必要の場合によく消費するは、もちろん善いことであるが、よく集めよく散じて社会を活発にし、したがって経済界の進歩を促すのは、有為の人の心掛くべきことであつて、真に理財に長ずる人は、よく集むると同時によく散ずるようなくてはならぬ。よく散ずるといふ意味は、正当に支出するのであつて、すなわちこれを善用することである。」⁸⁾

洪沢からすると、正しい経済活動は社会を發展させ、人々を救済するという意味で、孔子の教えに適うものであるはずであるにもかかわらず、それが正しく伝えられなかったがゆえに、実業を軽視する風潮が広がり、結果として道德と経済が切り離されてしまったことで、かえって実業家を利己主義に走らせることとなった。そうではなく、仁義道德によって利用厚生を道を進めていくというように、経済の流れを変えて、義理合一の信念を確立することが大切であると洪沢は説いている。

(二) 道德に基づいた経済活動

経済活動が国家社会の發展と人々の幸福のために必要不可欠であることを主張する一方で、洪沢はそうした経済活動が「正しい道理」に基づいたものでなければならぬことを強く主張する。日本の商工業者が目先の利益に走ってしまう傾向にあることを指摘し、結局非道德的な形で私利を追求したとしても、長期的な事業の繁栄にはつながらないとした。特に欧米との交易において、日本の商工業者全体に広がるそのような傾向が信頼を失墜する原因となっている現状を悲嘆し、それが日本という国家経済のためにもならないとの批判を加える。

そこで洪沢が拠って立つとうとする精神が武士道である。武士道の神髄である正義、廉直、義侠、敢為、礼讓などの美德を実業界に移植することによって、実業道というものを構築するこ

とを提唱する。武士道の神髄は正義、廉直、義侠、敢為、礼讓等の美風を加味したものである。従来はこうした武士道は、商工業者とは無縁のものであると考えられてきたが、文明国においては、商工業者も拠って立つべき道としなければならぬ。従来の日本の商工業者が約束を守らないなど道德的觀念を無視してきたことによって、欧米人が商取引において日本人に絶対の信用を置かないことは、日本の商工業者にとって非常に大きな損失である。

維新後、物質文明が急激に發達したのに対して、道德の進歩がそれに伴わなかったことは残念である。これに対して、外国の風習をただ取り入れるだけでなく、日本の古くからの慣習に基づいて、その社会に適應する道德觀念を養成することが必要である。洪沢は儒教に基づいた武士道の精神にそれを求めたのである。

同様に金錢を卑しむ傾向についても、利欲に迷いやすく仁義の道に外れることが多かったことを認めながらも、社会の發達とともに、人々の思想感情も高くなってきたので、単に金錢を卑しむのではなく、道義に基づいた金錢の眞価を利用することが大切であるとしている。

(三) 公益の追求

洪沢は、「公益と私利」の関係について次のように論じてい

る。「公益と私利は一つである。公益は即ち私利、私利能く公益を生ず。公益となるべき程の私利でなければ真の私利とは言えぬ。而して商業の真意義は実に此処に存するものであるから、商業に従事する人は、宜しくこの意義を誤解せず、公益となるべき私利を営んで貰い度い。」すなわち、事業活動は自己の利益のみならず、多くの人や社会全体の利益となるようなものであるべきだという考え方であり、これは多数の企業の経営に携わった渋沢の企業家としての活動に色濃く反映されている。

これはそれぞれの事業活動が社会に支えられて成り立つものであるという認識に基づくものであり、いかに苦勞して築いた富であったとしても、それが自己一人の専有だと思うのは甚だしい見当違いであるとしている。国家社会の助けによって自らを利し、安全に生活できるのであるから、その恩恵に応えることは当然の義務であるとするのである。具体的には様々な救済事業に協力する形で、できるかぎり社会のために助力するよう努めなければならない。

具体的には事業を通じて得られた利益を、公益のために正当に支出して善用することによって、社会を活発にしていくなことが大切であり、多く社会を益することではなくては、正しい事業であるとは言えない。仮に一個人のみ大富豪になっても、社会の多数がそのために貧困に陥るような事業であったならば、そ

の幸福は継続されないであろう。国家多数の富につながる方法でなければならぬ。このように社会に還元されることによつて、利益は正当化されると考えた。

このような公益に対する考え方は、渋沢が関係した多くの社会事業に反映されている。

(四) 人格の修養

渋沢は実業道を推進するために、特に実業人の人格の修養を重視する。利益の追求自体を否定するものではないが、現実に利益のために不正を行う動きがあることを問題視し、実業人の人格を高めることの必要性を痛切に感ずると、渋沢は主張する。『論語と算盤』の「人格と修養」の章において、人格が人間の真価を評価するための重要な基準であるとして、その人格を高めるための修養の重要性を重んじている。そしてその修養のための方法として、儒教の中心的な徳目である「忠信孝悌」を実践することを通じて自分を磨くことを挙げている。その後「実業と士道」の章では、商業道徳を高めていくための方法として、経営者が日常の経営における道徳の実践を通じて自分を磨いていくことの必要性を説いている。そうした実践を通じて商業道徳を経済の進歩に応じたレベルに引き上げることが日本にとって喫緊の課題であるとしている。

田中一弘は、「道德經濟合一説」は二つの主張から成り立っていると指摘している。⁹⁾ 第一の主張は、「經濟は道德に一致する」というもので、經濟は道德に適い、かつ道德に不可欠なものであるとする考えであり、富を生み出す事業活動は、正当な方法によれば社会の利益を生み出すものであり、それは道德の実現にとって必要なものであるとする。經濟活動によって人々の生活が豊かになり、安心した生活を送ることができるようになることは、人々を救済することであり、儒教道德に通じるものであるとする。

第二の主張は、「道德が經濟に一致する」というものであり、道德は經濟に適い、かつ經濟に不可欠であるとする。すなわち、道德なき經濟は、社会に争いを招き、結果として經濟を破壊してしまうので、健全な經濟のためには道德の要素を欠くことはできないとする主張である。その意味で、經濟と道德はどちらも本来は一体不可分のものであると説いている。特に、当時の状況においては商人の意識が低く、不道德な商慣行が横行していた。それは、結局のところ商人の社会的な地位を貶め、それが道德的自制を弱めることになっていった。

特に貿易が盛んになると同時に、日本企業に対する信用を高めることが緊急の課題となっていた。そのためにも、悪しき商慣習を廃し、商業道德を改善すること、特に商人の意識と言動を誠実なものにすることを、渋沢は生涯を通して訴え続けた。

渋沢の信念は、民間の事業活動が活発になることによって、一國の經濟を富ませることができるというものであり、この信念に基づいて、実業人に公益の担い手としての使命感を持たせようとした。この点について渋沢は次のように述べている。

「公益はすなわち私利、私利よく公益を生ず。公益となるほどの私利でなければ、神の私利とは言えない。しかして商業の真意義は、実にここに存するものであるから、商業に従事する人は、よろしくこの意義を誤解せず、公益となるべき私利を営んでもらいたい。これすべて一身一家の繁栄を来すのみならず、同時に國家を富裕にし、社會を平和ならしめるに至るゆえんである。」¹⁰⁾

このように事業を公益実現のためのものと考えた渋沢は、多くの実業人の力を結集して産業を興すことに向けた。それが合本主義であり、それによって日本經濟全体の發展を圖ろうとしたものであった。同時に、そうして得られた利益を、さまざまに社会事業に還元することも率先して行うとともに、多くの人々を巻き込んでいった。渋沢にとつては、このような事業を公益に結び付くものとしたのである。

五 廣池千九郎の道德經濟一体思想

廣池千九郎も、また道德と經濟は一体のものであるという考え方を廣池の主著である『道德科学の論文』や『道德科学經濟学原論』、また講演などの中でも繰り返し説いており、「道德經濟一体思想」と呼ばれている。また近年ではその思想を現在の経営に適用して『道經一体経営原論』としてまとめられている。廣池の道德經濟一体思想は、道德を基軸にして人間と社会のあり方を考える学問として彼が提唱した「道德科学」の体系の一部として、經濟社会のあり方を説いたものである。廣池は、人間の物質生活を支えるものが經濟であり、精神生活を支えるものが道德であるとして、この両者は本来一体のものであり、また一致させなければならぬとした。廣池の道德經濟一体思想の要点をまとめる。

(一) 道德と經濟の本質的一体性

廣池は、人間の物質生活を支えるものが經濟であり、精神生活を支えるものが道德であるとして、この両者は本来一体のものであり、また一致させなければならぬとした。

「およそ人間の実生活の内面生活は道德に存し、外部生活すなわち衣食住は經濟に存することを悟ってこの両者の本

来一体であるべきこと（さもなきもの）両者の必ず一致すべきことは必然的にして、天地間における人間生活の大法則はここにあることを発見、確認するに至ったのであります。」¹⁾

上記の文章に見るように、人間の实生活は精神生活（内面生活）と物質生活（外部生活）から構成されており、前者を支える基本原理が道德であり、後者の場合には經濟であるとしている。その上で、この両者は人間の生活を支えるという意味で表裏一体のものであり、本質的に一体であるべきものであるというのが、廣池の基本認識である。現実社会においては、この両者が一致しない場合があり、道德に基づかない經濟活動が行われていることを認めながらも、結局そのような活動は長続きしないために、企業にとっても、社会全体にとっても持続的な発展をしていくためには、經濟活動は道德に基づいたものでなければならぬというのが、廣池の「道德經濟一体思想」の中核である。

(二) 品性の重視

廣池は道德の実践を通じた品性の涵養を重要視しており、それが個人の幸福につながるという主張をしている。そして経営者に対しても、事業活動を行う前提として、まずその品性を高

めるように努力することが重要であると説いた。それを端的に表したのが、「品性を第一資本とし、金を第二資本とす。」という文章である。⁽¹²⁾ 実際の経営指導においてもこの考え方に基づいて、新しく事業を始めたり、事業の拡張を図る場合にも、まず経営者の品性の向上を第一に考え、それに見合った形で漸進的に事業の拡大を進めていくことを説いている。

(三) 三方よしの経営

現在近江商人の経営理念として広く知られる「三方よし」ということは、実は近江商人が活躍した江戸時代や明治時代には確認されていない。「三方よし」ということは、昭和の初期に廣池が「自分よし、相手よし、第三者よし」という形であれば使用しており、それが廣池に師事する人々の間で広がっていたことが確認されている。筆者は、この廣池の用いた「三方よし」という語が、後になって近江商人の研究者によって近江商人の理念を表すことばとして援用され、それがキャッチフレーズ的に用いられるようになった可能性が高いと考えている。⁽¹³⁾

廣池における「三方よし」の概念は、経済に限定されるものではなく、広く道德の実践一般において、その当事者だけでなく第三者に対する配慮を欠いてはならないという教訓である。次の文章がそれを端的に表している。

「完全なる道德はその行為の動機・目的及びその方法の三者ともその時と場合とに適合してその結果が良好であつて、これを行う当事者はもちろん、相手方及び第三者たる社会もまた安心と幸福とを得るようであればならぬのであります。⁽¹⁴⁾」

特に事業活動には取引の当事者の利害だけでなく、それ以外の第三者に対しても、危害を避け、利益を与えなければならぬということになる。それは次の記述で明確に示されている。

「完全なる経済学及び経済組織は、必ずや(一) 自己、(二) 使用人、(三) 原料もしくは商品の仕入先、(四) 販売先、(五) 需用者、(六) 一般社会(需用者の喜ぶことにても一般社会を害することあり、故に需用者と一般社会との利害必ずしも一致せず)及び(七) 以上全部を統制するところの国家に対して、その各方面がおのおの相当の利益を得ることくに組織されておらなくてはならぬのであります。⁽¹⁵⁾」

この記述の中で「需用者の喜ぶことにてても一般社会を害することあり、故に需用者と一般社会との利害必ずしも一致せず」という指摘は、直接の取引相手である顧客の満足を高めること

が、社会全体に対して害を及ぼす可能性があるという視点であり、まさに三方よしの考え方そのものである。この考え方は、まさに現代の経営倫理でいうところのステークホルダー理論に一致する考え方である。すなわち三方よしとは、多様なステークホルダーの利害に対して配慮するような事業活動を求める考え方であると言えることができる。

(四) 永続性の追求

廣池千九郎は、事業活動において急速な拡大による一時的な成功ではなく、ゆっくりでも確実な発展を目指す経営を推奨し、それを末弘性（末広がり経営）と呼んでいる。「創業は易く、守成は難し」という格言を引いて、「創業の徳」とは異なる「守成の徳」が事業の持続的発展のためには重要であり、そのために経営者に対して道徳を実行して自己の品性の涵養を求めるとともに、従業員に対する品性教育を通じた組織の道徳化を説く。事業の拡大に対応するだけの道徳的経営を行うことによって、社会からの信頼を得ることができ、事業の永続につながるとしている。

六 洪沢に対する廣池の義務先行説に関する影響の可能性

以上のように洪沢と廣池の思想には非常に近いものがあるが、相互に何らかの影響が考えられるであろうか。その点について考察してみたい。

両者がこのような道徳と経済に関する思想を展開するのは、明治の末期頃からであり、大正五年頃から特に両者ともに積極的に講演や著作などで発表をするようになっていく。時期的には若干洪沢が早いともいえるが、ほぼ重なり合っているといつてよいであろう。

両者の関係からいえば、廣池は当時のベストセラーとなった洪沢の『論語と算盤』を読んでいることは、確認はできていないが、十分に予想できることである。一方、廣池が洪沢に対して与えた影響についてだが、少なくとも洪沢は一九一三年（大正二年）の帰一協会における講演と一九一九年（大正八年）の華族会館におけるモラル・サイエンスに関する講演を聞いている。その他に直接の面会の機会もあつたようだが、それだけでは何らかの影響があつたかどうかは確認できない。

ここでは、一つの可能性として、廣池の「義務先行説」が洪沢に対して何らかの影響を与えた可能性があることを指摘しておきたい。⁽¹⁶⁾ 先述したように、廣池が初めて「義務先行説」を公

にした場として位置付けている一九一三年（大正二年）の婦一協会における講演には渋沢が出席しており、廣池に対して強い関心を抱いた記録が残されている。

身近な人々が残した渋沢の言行の中には、個人的信念として義務を重視する姿勢がしばしば言及されており、また講話などにもたびたび登場する。いくつかその事例を紹介する。

渋沢の息子である渋沢秀雄や、その子である渋沢和男の回想録の中には、渋沢が義務を非常に重視しており、それを教訓として子どもたちに伝えていたという以下のような記述が残されており、その内容は義務先行説を想起させるものとなっている。

「権利のあるところには必ず義務がともなう。権利を先にして義務を後にするようでは、決して人から信頼されない。（労使の関係もこれに近づく傾向がないことはない。）」¹⁷

「また雑談の折に、祖父（注・栄一）は父（注・秀雄）にこんなことも話した。（中略）権利には必ず義務が伴う。義務の方を先にして、権利を後にするようであれば決して人から信頼される人間にはなれない。私がもし一身一家の富だけを考えていたなら、三井や岩崎にも負けなかったろうよ。——ここで祖父は父に微笑んで——これは負け惜

しみではないぞ。」¹⁸

また渋沢秀雄は、栄一が亡くなる前年の昭和五年に、社会事業家代表者など二十名が、面会を求めてきた時のエピソードを「最後の義務」として紹介している。¹⁹

その時、九十一歳の栄一は風邪をひいて寝ていたが、どうしても会うと言いつ出した。用件は、寒さと飢えに苦しむ窮民が二十万人もいるので、政府が救護法という法律を作ったが、予算がないために救護が実施されていない。ついでに栄一の尽力で、さっそく実施するように仕向けてほしいという。この要請に対して、渋沢は次のように答えている。

「私はこの年になるまで、及ばずながら社会事業に尽くしてきたつもりです。皆さんのお心持は実によく分かります。老いぼれた身体で、どれだけお役に立つかしれませんが、できるだけのことはいたしましょう。それが私に与えられた義務だと信じます。」

その後、すぐに渋沢は大蔵大臣と内務大臣に電話をかけ、面会の約束を取り付けて、風邪の身体をおして自動車で直接訪問をした。

これら一連のエピソードからは「義務」を重視して先に行う

ということ、教訓として洪沢が重視していたことがわかる。こうした姿勢に対して、廣池がどの程度影響を及ぼしているかは不明確であるが、少なくとも洪沢にとって義務先行に近い考え方が定着していたことは事実である。一般に義務を重視するという考え方は広くあるが、義務を先に行ってそれによって権利が後からついてくるという「義務先行」という考え方は、廣池の東洋法制史の研究の中から見出されたもので、独自性の高いものであると考えられる。その意味で廣池の義務先行説が、洪沢に対して何らかの影響を与えている蓋然性は高いと考えるが、現時点においてはそれ以上のことは確認できていない。

七 洪沢と廣池の思想との比較

以上、洪沢と廣池の道徳と経済に関する思想についてその要点を整理してみたが、それでは両者の思想は、どのような点で共通しており、またどのような点で違いがあるのだろうか。両者の思想を比較してその点を明らかにしていく。

まず、道徳と経済を一体のものとして捉え、事業経営を道徳に基づいたものに行なうべきではないという基本的な方向性としては、両者の基本的な考えは一致している。特に国家社会の恩恵によって企業活動が成立していることを重視して、私利の追求を抑制して公益に対する貢献を強く求めるという点も共通

している。その意味では、「道徳経済合一説」も「道徳経済一体思想」もほぼ同一の内容の表現の違いであるとしてよいであろう。

また、両者がこの思想を積極的に説いた時期もほぼ重なっている。洪沢の場合、本人の記述によれば実業の世界に入ってから一貫して道徳と経済の一致を意識して活動してきたとされているが、論語を基にした道徳の鼓吹を積極的に展開していくのは、『青淵百話』を刊行し、婦一協会を設立した明治末期の頃からである。見城悌治は、一九〇九年（明治四十二年）に洪沢の門下生や近い人々の間の親睦学習サークル的存在であった竜門社が社則を変更して、月刊誌『竜門雑誌』を中心にして洪沢の思想を社会に積極的に発信され始めたのを、「経済道徳合一説」を積極的に展開し始めた時期としている。²⁰その後、一九一六年（大正五年）に実業界を引退し、『論語と算盤』を刊行した時期から、「経済道徳合一説」に基づく啓蒙活動が本格化してくる。

廣池の場合も、やはり明治末期から労働問題の道徳的解決の問題に取り組みはじめ、一九一〇年（明治四十三年）に三重県の三重紡績会社で行った講演が労働問題に対する最初の講演にあたる。その後、一九一五年（大正四年）から一九二一年（大正十二年）にかけて、全国で数多くの講演を行っているが、その講演テーマの中心は、労働問題の道徳的解決や現代思想に対

する批判等、社会問題に対する道德的解決の必要性に置かれた。一九一九年（大正八年）十一月に華族会館で開催された講演には、渋沢も参加している。

この時期に両者が経済活動の道德化を訴える活動に積極的に取り組んだ背景には、共通した問題意識が存在している。それは労働運動の高まり、とりわけ社会主義の影響力の増大による社会の混乱に対する強い危機意識である。両者ともに拡大する労働問題を解決するためには、資本家・富豪の側の意識を大きく転換することが必要であり、そのためには道德が必要であるという強い意識があった。両者ともに労働者の苦しい状況に対して、共感的に受け止めようとする姿勢も共通している。²¹⁾

また、両者ともに教育、特に人格教育（品性教育）を重視し、積極的に教育活動に取り組んだという点でも共通している。渋沢は、東京商業学校（現・一橋大学）をはじめとして、大蔵商業学校（現・東京経済大学）、高千穂商業学校（現・高千穂大学）などの設立に携わるなど、商業教育の振興に大きな力を注いだ。それは実業人の地位向上を目指すものであり、そのためにも実業人の道德の向上が必要不可欠であるとして、特に公益を重視する姿勢を繰り返し学生に向けて説いている。廣池も一九三五年（昭和十年）に道德科学専攻塾（現・麗澤大学）を設立しているが、それでも道德に基づいた品性教育が語学等の実業教育と並んで教育の柱とされている。

このように、両者の経済と道德をめぐる思想には共通点が多いのは事実であるが、細かく見ていくと、相違点もいくつか指摘することができる。

まず最も重要な相違点としては、経済と道德の両者の統合を主張する点では両者は一致しているものの、その重点の置き方が、渋沢の場合には経済寄りに置かれ、廣池の場合には道德により大きなウエイトが置かれているという点である。これは明確に線引きできるわけではないが、両者の比較を行った場合にはその違いが浮かび上がってくる。

具体的に言えば、渋沢にとつては実業人の社会的地位の向上が大きな関心事であり、それを実現するために実業人の間に実業道德を浸透させて、その道德意識・公益意識を向上させることが何よりの重要課題であった。その意味で、道德に支えられた経済活動の追求に重点が置かれている。

一方で、廣池にとつては、道德実行に基づく個人の品性の向上を通じて、個人の幸福と社会の平和的發展を実現することが最大の課題であった。人間の幸福実現のための物的な基礎としての経済の重要性は認めながらも、生活全般を通じての道德の実行こそが幸福実現の道であるとするものであって、この立場からは経営活動も、他の生活場面と同じく道德を実行する場の一つであると位置づけられる。

このような違いは両者の基本的な立ち位置の違いに基づくも

のであると考える。すなわち、洪沢が民間の経済活動の振興を通じて日本の国力を高めることを使命とする経済人であったのに対して、廣池が根本的には人々の精神的救済を目指して、道徳の科学的研究を進める研究者・教育者であった。

洪沢の「道徳経済合一説」は、体系的な理論というよりも、儒教を基盤とする洪沢自身の個人的修養と実業経験の中から生み出された教訓的な性格が強く、その内容も事業活動に即した実践指向が強い。実業道徳の鼓吹も、実際の経済活動に対する社会からの信頼を高めるための手段としての取り組みである。その意味で、当時の日本の実業界の状況に対して現実的に対応するための方策という性格が強い。もちろん「道徳経済合一説」には洪沢自身が培ってきた深い哲学や実践が含まれており、経済社会全体のあり方を問う内容であることは間違いなく、単なる実業道徳を奨励するというだけの内容と受け取るのはあまりにも単純化したものである。この点については、大谷まことが「道徳経済合一説」が単純化されて受け止められているとする穂積陳重の見解に基づいて、指摘している通りである²⁶と考える。ただし、全体として見た場合に断片的であり、理論的・体系的でないのは事実である。

これに対して廣池の「道徳経済一体思想」は、道徳科学という大きな理論体系の一部として生まれてきたものであり、それは儒教・仏教・神道・キリスト教の信仰の研究と、道徳に関する

幅広い学問的研究に基づくものである。当時の経済学理論についても、専門外のために十分とは言えないにせよ、学問的議論をpushした上で、道徳的見地からの批判的検討を加えている。その意味で、廣池の「道徳経済一体思想」はより理論的・体系的なものとなっており、経済システムに対する根本的な批判と結びついている。

廣池の場合においても経営活動における道徳の実践を重視しているが、あくまでも道徳の実践という点に重点が置かれており、企業経営自体も道徳実践の重要な場として捉えられる。したがって事業を通じた道徳的啓発、道徳教育が特に重視される。この点について、『道徳科学の論文』の中で、実業人としてはただ一人郡是製糸の社長の波多野鶴吉氏の事例が取り上げられていることに注目したい。波多野氏がキリスト教の教師川合信水を招いて社内で道徳教育を行った事例が紹介されているが、波多野氏が川合師を強く尊敬したことによって、波多野氏の死後も社内において川合師が尊敬され続け、それが郡是隆盛の原因となっていると考えている。もっとも廣池は、この事例についても最高道徳ではないと言っているが、企業における道徳教育を重視していたことの一つの表れであると言っているであろう。

企業活動が道徳実践の場であり、人心開発救済の場であるとする廣池からすれば、洪沢に関しても、洪沢個人の道徳的姿勢

については高く評価するものの、経営の場を通じての道德の実践や精神的な教育という面に関しては、最高道德の実践という廣池の高い理想からすれば、不十分と受け取られたのではないかと思われる。洪沢の思想や活動が最高道德とまでは至っていないという廣池の評価の理由は、このあたりに見出される。

例えば、利益に対する考え方も、洪沢の場合には、公益を重視はするが、私利の追求が公益につながるというアダム・スミスの考え方に近いと考えられる。一方で廣池の場合には、アダム・スミスの自己利益を肯定的に捉える姿勢が、その後の資本主義の展開において資本家の自己利益の過度な追求や拝金主義につながるものであるとして、批判的に捉える。

こうした両者の違いが最も顕著に表れるのは、共同事業に対する捉え方である。洪沢は「合本主義」を唱えて、多くの人々に出資や経営への参画を促すことで、事業の拡大を積極的に推進した。一方廣池は共同事業に対して否定的・消極的であった。経営者自身の品性を重視する立場に立つ廣池は、いたずらに共同事業を営むことにより、不道德的な要素が入り込むことを警戒した。現実的に考えた場合、洪沢が多くの人々の力の結集によって実際上の成果を出すことに重点を置き、実際に数多くの企業を設立し、軌道に乗せたことは、大いに評価されている。もちろんその中には問題を抱える企業もあったが、全体としては日本経済の発展のために大きく寄与したことは間違いない。

い。廣池の指摘する問題点は現実に存在するが、純粹に経済活動という視点から見れば、他者との協力は必要不可欠である。このあたりにも、問題と直面しながらも事業を進めなければならぬ実業人としての洪沢と、あくまでも原理に基づいた道德の実践を重視する研究者としての廣池との間の、経営者の道德性に対する両者のスタンスの違いが表れている。

両者がともに熱心に取り組んだ教育や労働問題の解決に関しても、このような両者の力点の置き方の違いがはっきりと表れている。

洪沢が、実業人育成を主眼として、それに必要な実業道德の修得を求めたのに対し、廣池は人間としての品性の向上を第一とした上で、生活の基盤づくりとして実業教育も重視している。また労働問題の解決についても、労働者の厳しい状況に理解を示し、労使協調を重視する姿勢は共通しているが、洪沢が協調会等を通じて労働者に対する賃金の引き上げなどの物質的救済をまず目指したのに対して、廣池は待遇の改善の重要性は認めながらも、根本的には労働者の教化による精神的救済に重点を置いた。ここにも現実の経済状況に直面する中で現実的な解決策を求めて、経済に重点を置く洪沢と、根本的な人間の精神的救済を重視する立場から道德が大きなウエイトを占める廣池との間の違いが表れている。

また、洪沢が積極的にさまざまな社会事業に取り組み、多く

の実業人を巻き込んでいったのに対して、廣池の場合には災害に対する救援活動や個人的な寄付などは行っているものの、自らが積極的に社会事業を推進することはなかった。廣池も社会事業の意義を軽視していたわけではなく、次の記述の通りに慈善事業などの社会事業自体についてはその意義を高く評価しており、その推進を重要な道德の実行として位置付けている。

「最高道德の実行者は、前記のほか、従来篤志の人々の行い来れるところの慈善事業もしくは公共事業のごとき社会事業に対して、従来実行し来れる以上に忠実且つ慈悲の精神をもって、及ぶだけまず自らその事業に尽力し、次に更に進んで、精神開発を伴えるところの社会事業の有用なる理由を最高道德の精神より説明し、あらゆる機会を善用して、その関係者を開発しもしくは救済すべきでありませ⁽²³⁾す。」

ただし、この記述にも見られるとおり、廣池はこのような社会事業もその関係者に対する精神的な開発救済の機会としなければならぬと考えていた。逆に言えば、そのような社会事業が当事者に対する道德的教育を伴い、精神的な開発につながるものでなければ、根本的な問題の解決にはつながらないといえる。これは、現実に物質的支援を軸とする慈善活動がかえっ

て当人の依存心を助長するだけになりかねないという現実に対する認識に基づくものである。もちろん、災害などの緊急時においては、無条件に物質的援助を行うことは人道上当然のことであるとしながらも、その他の慈善活動に対しては、精神面での道德的改善（開発）活動を重視しており、廣池自身はその方面に力を集中させた。この点は洪沢との明らか違いである。

八 まとめ

以上、廣池と洪沢の関係性を探りながら、両者の思想の共通点と相違点について概観してきた。大きな方向性として経済と道德を一体として捉えて、それを経営における実践へとつなげていくと視点では両者は共通しているが、細かく両者の思想や活動を比較してみると、その違いが明らかになってきた。それは、現実の経営に携わる実業家として、数々の経済問題に対する現実的な対応を迫られて、その解決策の一つとして道德的経営を模索する実践家としての洪沢と、広く人間社会全般の問題を対象として捉え、精神の道德的改善を通じた根本的な問題解決を追求する教育者・救済家としての廣池の違いが随所に表れてくる。

これはどちらかの優劣の問題というよりは、それぞれの方法論の違いであると考えられる。ただし、経済活動に対して高い

道徳性を組み込んでいく必要性を認識し、それを社会に強く訴えようとする方向性では両者は一致しており、特に洪沢の日本経済の発展における業績と現在にまで至るその思想の影響力については大いに評価すべきであると考ええる。

現在、資本主義のあり方に対する見直しの声が高まりつつあり、SDGs、CSV経営、ステークホルダー資本主義、公益資本主義といった様々な動きが世界全体で起きつつある。そこに共通しているのは、個々の企業の利益の追求を無条件に是認する資本主義経済のあり方に対する反省であり、持続的な社会の発展に対する企業の責任を重視する姿勢である。

現在、洪沢栄一の業績と思想が脚光を浴びているのも、こうした社会的な背景と無関係ではないと考ええる。廣池の「道徳経済一体思想」も、洪沢の思想を理論的に補完・強化するものとして位置付けられる。特に経営者の道徳的・倫理的な姿勢が問われてきている中で、品性を重視するという視点は、経営における道徳の実践という点で、現代社会にとって重要な意味を持つものであると考ええる。

最後に、冒頭に触れた廣池が洪沢の業績、特に「道徳経済合一説」に言及していない理由について、私なりの推測を挙げておきたい。一つは、長男の篤二が遊蕩を重ね、結局は廃嫡することとなったことに対して、廣池が何らかの忌避感を持っていた可能性である⁽²⁾。これには、洪沢の女性関係が遠因となってい

るとも言われている。この可能性は否定できないものの、確認をすることはできず、また洪沢の業績に対して廣池が講演等で評価している場合もあるので、あくまでも一つの可能性にとどめたい。他の一つは、洪沢の業績を評価しつつも、最高道徳的には不十分であると考える廣池の立場から推測する見方になるが、洪沢について言及することによって、廣池自身の考え方が、洪沢の垂流ととられることを避けた可能性である。洪沢の思想が、『論語』のみを典拠とするものであり、体系的でもなかったことから、思想としては十分でないと考えていたのではないかと推測できるが、これも確実に言えることではない。今後の課題として、さらに研究を進めたい。

注

- (1) 廣池(一九三二)
- (2) 『道の友』第二六四号、一九一三年
- (3) 『斯道』第六四号、大正九年一月号
- (4) 『斯道』第七〇号にも開催の記事があるが、六月三日となっている。
- (5) 廣池遺稿
- (6) 廣池遺稿
- (7) 洪沢栄一(一九九二)
- (8) 洪沢栄一(一九九二)
- (9) 田中(二〇一四)

- (10) 洪沢栄一(一九九二)
 (11) 廣池(一九三九)一三頁
 (12) 廣池遺稿
 (13) 大野(二〇一二)
 (14) 廣池(一九八六)⑧ 三〇九頁
 (15) 廣池(一九八六)⑧ 五九頁
 (16) 洪沢が義務の先行について関心を持っていたことについては、久次米宏祐氏にご教示いただき、本論文執筆の一つのきっかけとなった。あらためて感謝申し上げたい。
 (17) 洪沢秀雄(一九五六)
 (18) 洪沢和男(一九八五)
 (19) 洪沢秀雄(一九五六)
 (20) 見城(二〇〇八)
 (21) 廣池千九郎の長男であり、道徳科学研究所の二代目所長である廣池千英は、一九二四年から一九三一年にかけて労使協調会に在籍しており、調査研究や労働争議の調停に携わっている。
 (22) 大谷(二〇一一)九〇頁
 (23) 廣池(一九八六)⑧ 二〇六頁
 (24) この件に関する経緯については、佐野真一の『洪沢家三代』が非常に詳細に取り上げており、洪沢家の相談役として、穂積、阪谷の両氏が重要な役割を果たしたことが示されている。

参考文献

- 大谷まこと『洪沢栄一の福祉思想』ミネルヴァ書房、二〇一一
 大野正英「三方よしの由来とその現代的意義」『日本経営倫理学会誌』第一九号、二四一―二五三頁、二〇一二

- 橋川武郎『グローバル資本主義の中の洪沢栄一』東洋経済新報社、二〇一四
 見城悌治『評伝 日本の経済思想 洪沢栄一』日本経済評論社、二〇〇八
 坂本慎一『洪沢栄一の経世済民思想』日本経済評論社、二〇〇二
 佐野真一『洪沢家三代』文春新書、一九九八
 洪沢栄一『論語と算盤』大和出版、一九九二(初出一九二七)
 洪沢栄一『洪沢栄一 雨夜譚／自叙伝(抄)』日本図書センター、一九九七
 洪沢栄一『論語講義』二松学舎出版部、一九二五
 洪沢和男『わが父 洪沢秀雄』あずさ書店、一九八五
 洪沢秀雄『父 洪沢栄一』洪沢青淵記念財団竜門社、一九五六
 洪沢研究会編『公益の追求者・洪沢栄一』山川出版社、一九九九
 田中一弘『道徳経済合一説 合本主義のよりどころ』(橋川武郎『グローバル資本主義の中の洪沢栄一』(第2章)東洋経済新報社、二〇一四)
 廣池千九郎『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』モラロジー研究所、一九八六a(初出一九二八)
 廣池千九郎『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』道徳科学研究所、一九三二
 廣池千九郎『道徳科学経済学原論』道徳科学研究所、一九三九
 モラロジー研究所編『伝記 廣池千九郎』モラロジー研究所、二〇一一

(キーワード：道徳と経済、洪沢栄一)